

題目：男性を対象とした認知症家族介護準備プログラムの検討

保健医療学専攻・看護学分野・在宅看護学領域

長澤久美子

キーワード：男性介護者 認知症高齢者 在宅介護 教育プログラム

1. 研究の背景と目的

厚生労働省の「認知症高齢者の現状(平成 24 年)」によると、今後認知症高齢者の増加が推測されている。それに伴い新オレンジプランでは、その人らしく生活するために地域での生活を推奨しており、在宅で生活する認知症高齢者の増加が見込まれる。また、介護者の増加に伴う男性介護者の割合も増加している(平成 25 年度国民生活基礎調査の概況)。その背景として、高齢者の「夫婦のみの世帯」割合と「親と未婚の子のみの世帯」割合の増加傾向(平成 27 年度国民生活基礎調査の概況)や、各年代ともに女性の労働力率の増加傾向(平成 27 年度版働く女性の実情)が指摘されており、介護に果たす男性の役割が期待されている。

一方、被虐待者から見た虐待者は男性介護者が全体の約6割を占めている(平成26年度高齢者虐待対応状況調査結果概要)。男性介護者の虐待の要因は、頼れる人がいない、外部に助けを求めない(小野, 2009)、また息子介護者では、介護知識や技術の乏しさ、仕事の両立の困難、親族からの身体的・精神的な支えが得にくい(上田, 2007)ことが関係しているとの報告がある。そのため男性が、介護経験のない時期から介護者としてストレスを上手に処理できるような知識や技術、認知症状の対処方法等を身に付けることにより、介護者になったとしても、よりスムーズに介護生活を送ることができると考えた。

そこで本研究は、介護経験のない男性を対象とした「男性のための認知症介護準備プログラム」を作成し、その効果を検討することを目的とした。

2. 方法

本研究は、以下の2つの調査で構成した。

1) 研究 1: 家族と同居する主介護者の情緒的消耗・介護肯定感とその関連要因を検討し、男性介護者の特徴を明らかにする目的で、自記式質問紙調査を実施した。質問紙は、「認知症に罹患した妻を介護する夫介護者の感じている困難(長澤, 2015)」の結果と、今回息子9名を対象に調査した「認知症に罹患した親の介護をする息子介護者が感じている困難」の結果、及び先行研究から作成をした。調査は、全国の認知症の家族を介護する同居の主介護者を対象とし、348名の回答を得た。【介護生活の反応】(情緒的消耗・介護肯定感)を従属変数、【介護生活の実態】【要介護者と同居介護者の要因】を独立変数として重回帰分析を行い、性別で比較検討した。

2) 研究 2: 研究 1 の結果から、介護経験のない男性を対象に、ストレス時の対処方法や援助を求めることの重要性を組み入れた「男性のための認知症介護準備プログラム」を作成し、その有効性を検討する目的で、準実験的研究を行った。対象は、教育実施群(介入群)42名、教育非実施群(対照群)43名であった。介入群には、男性のための認知症介護準備プログラム(認知症の知識、認知症予防体操、介護食の作り方視聴・試食、男性介護者講話、ストレス対処法、おむつ交換方法見学、及び市販のパフレット)を、130分2回を1セット(合計260分)として実施した。対照群には、市販のパフレットのみを渡し自己学習を促した。両者を介入前(T1)・介入直後(T2)・2か月後(追跡調査

T3)で比較し、効果を検討した。また、介入群には介入後の理解度・役立ち感等の各プログラムの感想の調査を行った。

3. 倫理上の配慮

研究1、研究2とも、国際医療福祉大学の倫理審査の承認を得ている。承認番号は、それぞれ<13-Io-193 第1研究全国調査><13-Io-87>(第1研究息子介護者調査)<14-Io-137 第2研究>である。

4. 結果

1) 研究1: 男女介護者の比較では、情緒的消耗は女性介護者が有意に高かった。また、男性介護者特有の情緒的消耗の促進要因は、要介護者の「物忘れ」「介護に時間がとられ思う様に仕事ができない」、抑制要因は「リハビリ担当の専門職に相談」「入浴介助」「喫煙して一息つく」であった。また男性介護者特有の介護肯定感の促進要因は、要介護者の「記憶障害(SMQ)」「介護期間(月)」「リハビリ担当の専門職に相談」「病院の送迎」「介護を他人に任せる不安」「仕事を辞めてまでも介護を行う」、抑制要因は「非常勤の勤務」であった。

2) 研究2: 介入群と対照群の比較では、属性では平均年齢と無職の割合、認知症の人と関わった経験の割合で介入群が有意に高かった。また T1 の比較では「認知症の知識」で対照群が有意に高く、T2 では「認知症のイメージ」2項目、「認知症に関する対応の自信」4項目で介入群が高く、T3 では有意差はなかった。また介入群では、「認知症の知識」は、T1 に比較し T2・T3 で上昇した。「認知症に関する対応の自信」では、T1・T2 の比較では12項目中10項目が上昇し、そのうち T2・T3 の比較で有意差の無かったものは9項目であった。しかし、「認知症のイメージ」の変化では、T1・T2 で有意に上昇したものは7項目中1項目、そのうち T2・T3 の比較で有意差の無かったものは0項目であった。各プログラムの感想は、それぞれ10点満点中平均8.3~8.4点であった。

5. 考察

本研究では、男性介護者の実際の困難感に基づき、ストレス時の対処方法や援助を求めることの重要性を組み入れた「男性のための認知症介護準備プログラム」を作成し、実施・評価をした。参加者の理解度や役立ち感は高く、妥当な内容であったと考える。また、認知症の知識や認知症に関連する対応の自信は向上し、2カ月後もある程度継続した事より、本プログラムは効果があったと判断できる。しかし、認知症のイメージについては有意な変化は見られなかったため、方法については今後検討の必要がある。

6. 結論

本研究で作成した、ストレス時の対処方法や援助を求めることの重要性を組み入れた「男性のための認知症介護準備プログラム」は、日本において今まで行われたことのない男性介護者の特徴を加味した介護準備のためのプログラムであり、今回介護経験のない男性を対象に実施した。その結果、「認知症の知識」及び「認知症に関連する対応の自信」の向上の効果を確認した。

引用文献

- 小野ミツ. 看護職が担う高齢者虐待の対応と予防—実践事例・活動から学ぶ—男性介護者による虐待の特徴と支援方法. *Community care* 2009;40-43
- 上田照子, 荒井由美子, 山西利政: 在宅要介護高齢者を介護する息子による虐待に関する研究. *老年社会科学*. 2007;29(1):37-47
- 長澤久美子, 山村江美子, 岩清水伴美. 認知症に罹患した妻の介護をする夫介護者が感じている困難. *家族看護学研究* 2015;20(2):117-124